

世界大会で出会った人々

染谷 徹

北欧3国がEU加盟の是非を問う国民投票を実施したとき、加盟賛成に最も強く傾いていたフィンランドで最初に投票を行ない、隣国加盟決定のニュースでスウェーデンの世論に圧力をかけ、両国の投票結果を材料として、最も強硬な反対派を抱えるノルウェーに既成事実をつきつける、という日程が組まれました。しかし、目論見に反して、ノルウェーだけはEU加盟を拒否してしまいました。フィンランドのエスペラント大会を經由してカリフォルニアから故郷のノルウェーに里帰りする年配のボンデリッドさん夫妻に、なぜノルウェーだけが加盟を拒否したのだろうか、と質問すると、奥さんの答えは単純にして明解でした。『ノルウェーは石油が出るし、魚も取れる。EUに加盟しないでもやっていけます。公害がないから空気も水もきれい。だから、魚は世界一おいしい。ぜひ、ノルウェーにいらっしゃい。』背筋をしゃんと伸ばし、大会中も、ロシア旅行中も、気に染まない場所には決して足を運ばず、微笑みながらも妥協はしない、という姿勢でした。一方、バイオリニストであり、コンピュータ学者でもあるご主人のマイロンは、エスペラントをブリッジ言語とする機械翻訳ソフトの開発を諦めていませんでした。100万人以上の言語人口をもつ世界の15言語の機械翻訳ソフトが完成すれば、その経済効果がいかに大きいかを力説する情熱には、現投のビジネスマンのような若々しさが感じられました。確かに、機械翻訳が実現すればEUは膨大な通訳翻訳予算を節減することができでしょう。また、EUが、どういう形であれ、エスペラントを採用すれば、日本や米国などEU以外の諸国のエスペラント観も大きく変わるでしょう。しかし、ノルウェーの魚とは違って、なんとなく生臭い話でした。

フィンランドのEU加盟についても、賛否両論を耳にしました。大ざっぱに言えば、都市部と若い世代は賛成、農村と年配層は反対という感触でした。しかし、政府の手厚い保護に依存してきた農業部門が重大な打撃を受けるだろう、という予測は誰に聞いても共通でした。これについて、タンペレ近郊に住む年金生活者のマッティは特に辛辣でした。『フィンランドは欧州の日本たろうとしたが失敗し、今は単に豊かな国のふりをしているに過ぎない。今回ついにEUに身を売ることになったが、すでにとうの昔からドイツ経済の軍門に下っているのだ。今走っている高速道路だって、建設したのはドイツの企業なんだ。』その、マッティは、たまたま隣の席に座りあわせたというだけの縁で、重いトランクを郵便局まで運んでくれ、所属の教会に案内して特製のトウモロコシ・クワスを飲ませてくれ、日曜大工で建てたという自宅に招いて、プロ級の写真スライドを見せてくれました。そればかりか、フィンランドの国民詩人トペリウスの詩碑のあるハルランハリオの塔に連れていってくれたのです。この木造の塔は、森と湖の国の美しさを自分の眼で確かめるための最高の場所のひとつと言えるでしょう。別れ際にマッティがくれたプレゼントは小さな新約聖書でした。そういえば、タンペレのレーニン博物館が話題に上ったとき、『行ったこともないし、興味もない。』というのがマッティの反応だったことを思い出しました。

親切なお年寄りといえば、スウェーデンから車で来て、その車をホテル代わりにしていたカ

ールエリックも暖かな人柄の人物でした。分厚い眼鏡をかけ、大きな四角い革のかばんを持ち歩き、中から楽譜を取り出しては、スウェーデンの歌を深い声で歌ってくれました。娘さんが急に来られなくなったための代理参加ということでしたが、連日多くの人々と精力的につきあっていました。最後に会ったときには、知りあったばかりの中国人のビザ申請を手伝うために警察に出向くところだと言っていました。それにしても、寒い北欧の人々の心の暖かさには改めて感心させられます。

マッティの嫌いなレーニン博物館は今や恐らく世界で唯一のレーニン博物館となりました。フィンランドと帝政ロシア、フィンランドとソ連の長く複雑な関係の一端が、ムーミン博物館に程近い古典的な建物に凝縮されているわけです。そのレーニン博物館の前の並木道で出会ったのが、スコットランドで観光会社をやっているデビッドとジーンでした。スコットランドの風物のお話がひとしきり済むと、話はエスペラントと英語の問題に移りました。エスペランチストの中には『言語帝国主義論』の立場から英語を敵視する傾向があります。簡単に言えば、(1) 英語は難しい、(2) 英語は世界共通語にふさわしくない、(3) 英語の押し付けは不公平である、というのがその論拠のようです。逆に言えば、(1) エスペラントは易しい、(2) エスペラントは共通語にふさわしい、(3) エスペラントは公平な言語である、ということになります。さらに、(4) 『アメリカ帝国主義』が嫌いだ、という条件も加わるかもしれません。では、英語を母語とする人々はどういうつもりでエスペラントを学ぶのでしょうか。それなりに特別の理由があるはずです。『英語などという、難しくて不公平な国際言語を使って申し訳ない。』と、大いに反省してエスペラントを学ぶのでしょうか。もちろん、同じ英語国でも米国と英国では事情が違い、同じ英国でもイングランドとスコットランドでは考え方が違うかもしれません。デビッドとジーンの考え方も本質的にはエスペラント＝平等・共通言語論でした。しかし、エスペラントを学ぶ決心をした人には、洋の東西を問わず、どこことなく人間的な、弱い立場を思い遣る優しさが感じられるのはなぜでしょうか。

言葉と民族の問題といえば、フランス人のルネとマルクも魅力溢れる老夫婦でした。マルクは誇り高いエスペランチストで、世界大会に来ている以上、エスペラント以外の言葉は決して口にしない、という態度を堅持していました。エスペラント以外の言葉による会話に遭遇すると、『このワニどもめが！』(注)という顔付きになり、それを奥さんのルネが面白がってからかうのです。たとえ何語であろうと話が通じれば良いではないか、とルネの方は柔軟路線です。この夫婦の娘さんの一人がフランス在住のベトナム人男性と結婚し、生れた孫のうち、男の子はフランス人の容姿だが、女の子はいかにもベトナム人で、それが本当にかわいい、というのがルネとマルクの自慢でした。混血の孫のことをこんなに誇らしげに、また、楽しそうに話すのは、二人がフランス人だからなのか、それともフランス人なのになのか、それはわからないままに、少々羨ましいような気持でした。

(編者注：エスペランチストが集まっているところで、エスペラント以外の言葉を使うことを、エスペラントでは比喩的に『ワニ語を話す』と表現します。)

大会が終わってからロシア旅行に参加しました。タンペレからサンクトペテルブルグまでのバス旅行です。沿道にはヤナギランが咲き乱れていました。ソ連の時代は終わっても、フィンラン

ドとロシアの関係は終りません。ソ連の属国のように見なされながらも、『シス（負けじ魂）』を発揮して独立を貫いたフィンランドにとって、ロシア問題が EU 問題に劣らず重要であることは言うまでもありません。会社の夏休みを割いてバス旅行のガイドをしてくれたライモはカレリア地方の出身者です。戦後の混乱期、ライモの一家はカレリア各地を点々と逃げ歩いた末にフィンランドにたどり着いたとのこと。カレリアはフィンランドの叙事詩カレワラを生んだ地域ですが、戦後賠償の一部として敗戦国フィンランドからソ連に割譲されました。ライモによれば、現在カレリアに残されている社会資本の大半はフィンランド時代の遺産であり、一方、フィンランド人は誰一人カレリアに残っていないというのです。ただし、その膨大な森林資源の開発にはフィンランドも参加しているが、ロシア側は代金を支払わないか、旧式武器を代金に当てようとしている、というのがライモの不満です。カレリアがフィンランド領であった頃には、国境線は当時のレニングラード、現在のサンクトペテルブルグのすぐ近くに迫っており、だからこそ、レーニンは弾圧を逃れて、簡単にフィンランドに入ることができたのです。ソ連時代には、フィンランドはソ連にとっていわば西側に向かって開いた窓口であり、例えば、ソ連のエレベーターの大半はフィンランド製でした。しかし、西欧との直接取引が可能になった現在、ロシアはフィンランドからの輸入に依存する必要がなくなり、フィンランドの対ロシア輸出は振るわなくなっているということです。フィンランド国民の関心はロシアよりも西欧に向かっており、ロシアも専ら西欧に顔を向けています。その結果、対ソ連貿易では実績のあったフィンランドも、相手が資本主義ロシア（または、資本主義を良く知らないロシア）では勝手が違い、今では対ロシア貿易のノウハウを得るためにわざわざ EU から専門家を招くという皮肉な現象も発生しているということです。いずれにせよ、フィンランドの人々はロシアの動向をじっと見守っている様子でした。

ロシア旅行のもう一人のガイドだったシグリードは、フィンランドの兄弟国であるエストニアの出身で、フィンランド人の夫と再婚し、ロシア語が堪能でロシアの事情にも詳しいことから、ガイドの役を引き受けることになったとのことでした。出発前のガイダンスでは、『首から下げた費重品の巾着は、紐を切られる恐れがある。ただし、女性は下着の紐に結べば比較的安全。』などと、皆を笑わせてくれました。旅行中にトラブルが起きても、『大したことじゃない』、といって笑い飛ばし、フィンランドのトイレットペーパーを持ち歩いて皆に分け与え、ミネラルウォーターの飲み残しを集めたボトルを何本も抱え込んで必要な人に配り、リリハンメル・オリンピックの開会式に出現したあの北欧の妖精のような紡垂型の容姿で駆け回っては、皆を勇気づけ、元気づけてくれました。そして、旅の終りには、ヘルシンキのホテルまで迎えに来た美人の娘さんをうれしそうに紹介してくれる母親でもありました。

イタリアのジュゼッピーナも忘れられない一人です。折り紙の名人で、緑色の描を折っては、行き会う人に配っていました。会場には緑の猫を胸につけた人が何人もいました。ジュゼッピーナの指先から魔法のように出現する様々な作品に回りに驚嘆の声が上がると、うれしそうに折り方を指南してくれるのでした。見せてくれた専門誌はイタリアの折り紙の水準の高さを物語っていました。日本の折り紙事情にも詳しいらしく、『タトウ』などという日本語を知っているのには驚きました。

この他にも、多くの魅力溢れるエスペランチストの姿が眼に浮かんできます。気品高く思慮深いイスラエルの老婦人ナオミとリリア、日本語の響きは私の国の言葉に似ている、と言ってキャンディーをくれたリトアニアのアンニ、ルーマニアの堂々たる大学教授フェリシア、本屋さんのクロークでアルバイトをしていた巻き毛のポーランド少年ダニエル、何にでもメロディーをつけて歌にしてしまうラトビアのバレンチノ、エレベーターのドアが開いた瞬間に奇跡のように対面したペンフレンドのマッテイ、そして何にもまして勇気を与えてくれた日本の仲間たち、皆忘れられない人々です。

初めて参加した世界大会の最大の収穫はこれらの人々との出会いでした。エスペラントを始めなければ会う機会もなかったこれらの人々との出会いを可能にしてくれたのは、タンペレ・ホールに一時的に出現したエスペラント共和国でした。そんなものは存在しないと聞いていた『エスペランド』が人の心の中だけでなく、一時的ではあれ、物理的にも実現し得ることを実感した1週間でした。

タンペレの街は『第80回世界エスペラント大会』の白地に緑字の横断幕で私達を歓迎してくれました。レーニン博物館だけでなく、アムリ地区の興味尽きない労働者住宅博物館もエスペラントのパンフレットを用意して迎えてくれました。人々は気取らず、それでいて優雅で優しく、北国の夏を心から楽しんでいました。大会が終る頃、市役所広場では夏の花の祭りが始まり、『エスペラント大会』に代わって『ヒロシマ1945年』の横断幕が掲げられました。

(完)

(C) 1996 SER (杉並エスペラント会会報 Sazanko n-ro 52, n-ro 53 より転載)